今日のイラスト 380　「 イラストでたどる萩往還⑱ 国境の碑」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 18

国境の碑

文・イラスト＝古谷眞之助

国境とは長門周防両国の境のことで、萩市と山口市の市境とほぼ重なる。文化五年（１８０８）に建て替えられた碑には「北長門国阿武郡、南周防国吉敷郡」と記されている。

イラストの石碑の左側を進んで右手に回り込むと、東側の谷に向かって下る道がある。この谷一帯にはかつて「一の坂銀山」があって、それが創成期の萩藩財政を支え、萩城の建設も可能にしたと言われている。今でもマブと呼ばれる坑道が残っているようだが、道はすでに荒廃していて通行禁止となっている。最盛期には鉱夫は３千人以上を数えたとも伝わり、山奥に残る魚屋町、八百屋町、女郎町などの小字の地名が往時の繁栄ぶりを物語っている。

　このシリーズも萩と三田尻のほぼ中間点、国境の碑まで来た。回数も全部で 36 回を予定しているので、こちらも半分まで来たことになるが、先はまだまだ長い。今回はこの碑の左手の道から入る「一の坂銀山」のことについて書いてみよう。その道を進むと東側に広がる谷へと下っていくが、この谷は、かつてそのものずばり金山谷と呼ばれていた。毛利氏保有の有名な銀山と言えば世界遺産にもなった石見銀山だったが、関ヶ原後にはこれを失い、そのため周防・長門の二か国に押し込められた当初は財政難に苦しんだ。石見に代わってこの銀山開発に力を入れ、結果的にこれが毛利氏を助けることとなった。「歴史の道調査報告　萩往還」山口県教育委員会・1981 には「一の坂銀山が長州藩成立期に、壮大な萩居城と城下町建設、参勤交代制、幕府の普請役の負担などの財政面に寄与したことを知るべきである。萩往還は一の坂銀山の交通路、つまりシルバー・ロードでもあった。しかし、銀山の盛況は長く続かず、寛永年間頃に廃絶した」とある。萩藩に大きく寄与した一の坂銀山も、わずか 40 年位で廃坑になってしまったのである。

　話はがらっと変わるが、私の知る限り萩往還沿いには悲恋物語は残されていない。道の駅「萩往還」近くの大屋刑場で磔の刑に処された後に、藩医・栗山孝庵によってわが国で初めて女体解剖された娘「美濃」と藩士の話は、よくよく調べてみれば、悲恋と言うよりも不倫の果ての処刑だった。もう一つ、三田尻勝坂の茶屋の人気娘「おろく」も、器量よしにありがちなやや高慢ちきな女性であったがために、すげなくされて逆上した武士に殺される、という具合に実に寂しいのである。ガイドの立場からすれば、ワクワクする痛快な話や悲しくも美しい物語が萩往還に是非欲しいところ。とすれば、例えば以下のように考えたらどうだろう。「幕末、藩の宝蔵には、天又銀（ 一の坂銀山産の銀貨 ）がうず高く積まれていた」かもしれないし、銀山が衰退したというのは表向きの話で、「幕府には深く秘して、実は倒幕のための軍資金確保のために秘密裏に採掘が続けられていた」「国境の碑付近は幕府隠密と藩の秘密組織が激しく戦った峠だった」と考えても、決して荒唐無稽な話ではないだろう。また、銀山に常駐した若い藩士と女郎に売られた心優しく美しい娘との悲恋物語もあってもいい。嗚呼、歯がゆいからいっそのこと書いてしまおうか。（ 2020.9.21　記 ）